

靖国神社遊就館は、「殉国の英霊を慰霊顕彰」し、「近代史の真実をより正しく伝える」ことを目的としているという。この数年は年間二、三、四万人の人々が来館している。今回、小誌での靖国神社特集もあって、先月に同館を再訪した際に、私は以前に一度出会ったドイツ人の

日本研究者スヴェン・サーラさんのことを思い出した。彼は靖国問題も研究しているはずだった。

久しぶりに会ったサーラさんは、靖国神社問題を重要な主題として考察した単行本を近く上梓すること。そして、A級戦犯合祀問題も、政教分離の視点も

重要だが、彼が最も注目してきたのは、遊就館に示されている靖国の歴史観それ自体であるという。

遊就館についての評価をきいてみた。十万点に及ぶという収蔵品、見やすい展示、大幅に増えた英語による解説等々、博物館として一定の水準を持っている。

ひと
2004

スヴェン・サーラさん……日本研究者

靖国神社の歴史観を

遊就館こそが体現しています。

南京虐殺を正視できない展示は

歴史の実相を捉えているでしょうか。

しかし、問題は、どのような視角から展示がなされているか、である。

サーラさんが最初に指摘したのは、明治維新の展示の冒頭で、一九世紀のアジアがいかに欧米列強の支配によって追いつめられていたのかが強調されていること。そしてその嚆矢として英国、東イ

ンド会社がベンガル地方を支配していく前提になった一七五七年プラッシーの闘いが大書されているのである。

「インドのこの闘いは明治維新とどう関連しているでしょうか。近代日本の戦争の背景には欧米列強のアジア支配が存在しており、日本は自衛のために避けが

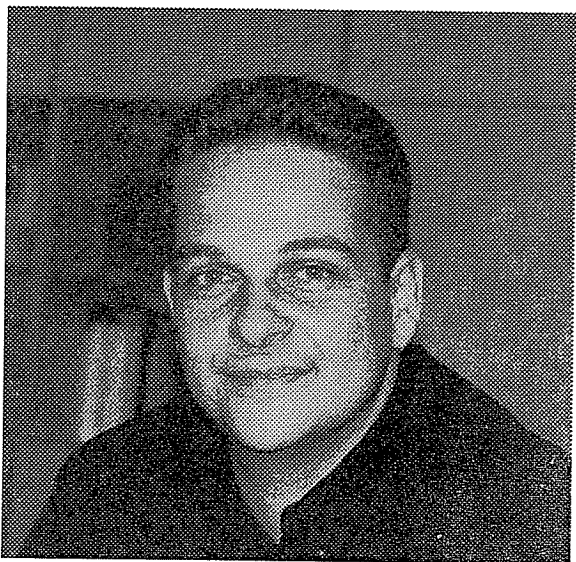
たい戦争をしたのだというロジックが随所で強調されているのです」とサーラさんは喝破した。いうならば、歴史教科書問題でも噴出した歴史修正主義の典型がここに示されているという判断である。サーラさんは、欧米列強のアジア支配を軽視する立場には立たない。そもそも

ドイツでの学生時代に欧米中心主義史観に反発することで、日本研究を志した彼は、かねてより西欧中心主義史観に陥ることを自戒している。後発帝国主義国の日本を西欧帝国主義と全く同様に描くことには、慎重である。

だが、肝心なことは、展示の底流にある歴史観が歴史の実相とどれだけ合致しているのか。とりわけ中国での長期にわたる占領と戦争は、欧米の侵略に対する防衛戦争だという評価になじまないではないか。サーラさんはそう考える。

「何が最も納得できない展示ですか」との問いに、彼は南京事件についての展示であると即答した。

「平和甦る南京 皇軍を迎へて歓喜沸く」という当時の「朝日新聞」の記事も展示しつつ、「市内では私服に着がえて便衣隊となった敗残兵の摘発が行われたが、南京城内では一般市民の生活に平和がよみがえった」と解説文は記している。これが幾多の生存者、当事者の証言、手記、映像、現代史研究者の仕事によって



説明されてきた南京事件についての的確な解説だろうか。

この種の展示を見て「強い違和感がある」ことを、サーラさんは隠そうとはしない。何よりも遊就館が、戦争を肯定し続けていることに同意できないという。

たとえば小泉首相の靖国神社参拝も、

サーラさんは理解できない。歴史修正主義の史観を「明確に否定します」と言わない限りは、容認することになるのではないのか。一国の首相として何も問題を感じないのか。

サーラさんは歴史家として「過去の克服」が容易であるとは思わない。故国ドイツでもそれは自明であった。ただ、戦没者追悼にあたって、ドイツと日本でのギャップをしばしば感じることでも確かだ。靖国神社では軍人・軍属のみが追悼されているのに対し、ドイツでは何よりもユダヤ人をはじめとして犠牲者の総体に目が向けられている。最近では、ロマ族や同性愛者、障害者の記念碑も設立された。日本でも沖縄、平和の礎には感動したというサーラさんが、靖国神社問題にどのような新たな光を当てるのか、新著が待たれる。